

Theatre & Policy

スコットランドよりご挨拶申し上げます。

この度私が大変情熱を注ぐ芸術と教育についてお話しする機会を得ることができ光栄に存じます。私が言う「教育」とは、学校以上のものを意味しています。それは、芸術が人々の人生や学習に与える、また与えられるであろう効果であり、芸術団体（劇場、ギャラリー、コンサートホール等）や芸術家がその中で果たす役割を意味するものです。

アメリカのケネディ大統領は、1960年代にこう述べました。「芸術活動は、国民の生活において、単に中断や気晴らしを意味するものではない。それは国家の目的の中心に最も近いものであり、国の文化度を試すものである」。しかし、国の文化度とは、政治家の気まぐれな思いつきではなく、市民一人一人が享受する文化的体験の質にかかるものです。そして国の芸術的資源よりも、文化的な体験を提供するにふさわしいのが、芸術家であり芸術団体なのです。文化の普及は、「芸術とは全ての人が観客として、また積極的な参加者として楽しむものである。」という基本理念にかかるのです。

本日これから私がお話ししていくのは、

- ・ なぜ私たちは学校や地域と関わっていきたくのかを、改めて考え、
- ・ 学校や地域と一緒に働く中で発見したいいくつかの課題に注目し、
- ・ これらの団体に対するマーケティングの方法を簡単に触れます。（マーケティングの専門家ではありませんが、有用な点と方法をいくつかご紹介します。）
- ・ そして、この仕事への取りかかり方についてお話し、次に皆さんがどのような活動を企画すればよいかについてお話しします。
- ・ 最後に、クリエイティブ・リンクスをつくる上で有益なスコットランドの国家施策の一つをご紹介しますと思います。

芸術・学校・コミュニティのあいだに橋をかける

「クリエイティブ・リンクス基調講演」

シルヴィア・ダウ

スコットランド芸術評議会
エデュケーション部長

まず最初に、理由から始めましょう。もちろん皆さんは既にその理由をご存知だとは思いますが、もう一度考えるに値すると思います。というのも、皆さんの所属する団体の全員がこれらの活動の目的や目標を認識しなければ、コミュニティ／学校プログラムに着手する意味がないからです。

最も一般的に挙げられる理由は、「観客を増やすため」というものです。「地域の活動にもっと人を集めましょう。そうすれば、皆イベントの主要な催しに参加する」という理由です。しかし、これは必要なことではありません。子どもための催しを例にとって考えてみましょう。常に使われるフレーズは、「将来の観客」で、「私たちは将来の観客を育てなければなりません。」と言われます。しかし、もし子どもたちを将来の観客としてしか見ないのであれば、今あなたが彼らに提供している演目の質についてはどう言えばよいのでしょうか。7歳の子どもは単純に21歳の1/3ではありません。彼も、子供たち全員も潜在的に現在の観客なのです。皆さんの仕事は、子どもの文化への扉を開くことであり、できるだけ良い経験をさせることです。しかし、将来、劇場に足を運んでくれるかどうか保証はできません。同様に地域の中で、人々に皆さんの劇場が快適で、親しみのもてる場所であると思って欲しいでしょうし、その場所は彼らが想像力を培い、他の人々と出会い、お茶やビールを飲む機会を提供する場であるのです。もちろん、皆さんは彼らが公演を見に劇場へ足を運ぶように、劇場を身近で楽しいものにするでしょうが、彼らが劇場に来るかどうかの保証はありません。彼らを「養成する」ことは皆さんの仕事ではありません。皆さんの仕事は、彼らに芸術を今体験する機会を与えることなのです。皆さんの持っている場所は、どういう方法であれ、彼ら - 若者、お年寄り、お金持ち、貧乏人 - が、最も有効に使える場所なのです。

スコットランドのある劇場の壁にはこんな注意書きが貼ってあります。「目が飛び出すぞ。客席の怠け者には目を向けるな」。つまり、私たちは人々に芸術の興奮や驚きをもたらしたいのであって、将来的な観客数を心配したいのではありません。観客の増加は、別の問題であり、継続的かつ「現在」抱えている問題であり、まず第一に効果的なマーケティングに裏打ちされた優れたプログラム構成によるのです。では、将来における想像上の観客が理由でないとしたら、私達がこの仕事をする理由は何でしょうか？この質問に対する答えは沢山ありますが、以下の答えを考えてみていただきたいと思います。

・なぜなら、あなたの団体は地域から切り離されたものではなく、地域の一員であるから。

ご自分の団体を地域的な団体又は全国的な団体と考えるか否かにかかわらず、劇場外部の人々は観客であるだけでなく、地域の人々でもあります。その中で、彼らにとって欠くことのできない部分である、と見られるべきなのです。皆さんは、芸術を通じて彼らと交流を深める方法を見つけ出し、劇場を親しみやすく、暖かく迎えてくれる場所にするよう努力すれば良いのです。現在スコットランドで起こっている興味深い運動は、「ファミリー・フレンドリー・イニシアティブ（家族に優しい運動）」です。これは家族全員（子供も大人も）にとって、劇場やその他の文化施設を行きやすい場所にする重要性をこれらの施設に印象付ける方法です。この運動を始めた施設のの一つが、スコットランドの中心に位置する大学の中にあるマックロバート・シアターです。

マックロバートは、最近、新築を含む改装工事を終えたところです。そして、この機会は、経営陣に改革の契機を与えました。既存の観客を大切にするとともに、今こそ家族と一緒に、また家族のための劇場を作る時期と考えました。新生マックロバートには保育所が付設され、両親は子供を正規の保育所に預けて、映画館や劇場に行くことができます。保育所には8つのクラブがあります。子供のための演劇、音楽劇、ダンスのクラスは大変人気があり、欠員待ちの状態です。新しい建物の一部は、子供用の劇場として設計された小劇場（メインとなる劇場は500席）で、子供たちから構成される特別な委員会を通じて、子供たちに何がしたいか、子供たちが何を考えているのかを質問しながら運営しています。建築家が建物を設計する際には、委員会である「ヤング・コンサルタント」に意見や考えが求められました。例えば、建築家が子供劇場にベンチ式の座席を計画していると知った時、子供たちは「ベンチ式はいやだ、もっと快適な椅子がいい」と主張し変更されました。ヤング・コンサルタントは、劇場内に彼らの好みの家具が置かれた委員会室も所有しています。

・なぜなら、これは相互的なもので、あなたの団体は地域と関わることで益を得て、同様に地域もあなたの団体がもたらす全てのものから益を得るからである。

いかなる劇団、俳優、芸術家も、芸術的な囲いの中で暮らしながら、作品に対する直感を得ることはないと思いま

す。少なくともそうあるべきではありません。前回の来日の際、私は北海道にある演劇学校を訪ねました。そこでは、学費、食費、家賃の代わりに、生徒は夏のあいだ地元の農家で働かなければなりません。夏中この苦しい作業を行うことで、彼らは現実に関わり、芸術に反映することができる物事を観察する何かを得るのです。ご存知のとおり、演劇とは何かのふりをするのではなく、人生や人格の反映なのです。私は皆さんに外へでて畑を耕すことを勧めているわけではありません。しかし地域に関わらず、芸術的な利益をもたらす、演目や作品に戻ってくるものがあるだろうと言いたいのです。

・なぜなら、芸術は私達の生活、学習、福祉にとって重要なものであり、芸術団体はその重要な提供者であるからである。

個人的なことを言えば、芸術は私に、楽しみ、考え、興奮、興味といった様々な扉を開いてくれています。私の心と精神に栄養を与え、笑いと悲しみをもたらす、考えさせます。皆さんにこのような経験をしていただきたいと思います。そして、劇場、ギャラリー、オペラ劇場、コンサートホール、芸術家、俳優に、彼らが地域に対してこれらの経験を提供する責任を負っていると感じて貰いたいのです。

以上のことが重要であると納得していただけたでしょうか。しかし、この仕事を行う上で私たちが知っているべき課題があります。まず、学校について、次に地域全般についてお話ししたいと思います。

芸術に対する考え方

残念なことに、世界に芸術を教育上優先順位が高いものと捉えた教育制度は存在しません。他の場所に比べ進んでいる場所も幾つかあります。スコットランドでは演劇、視覚芸術、音楽（度合いは低いですがダンス）は、14歳までの生徒を対象にした主要なカリキュラムに含まれ、更に深く学びたい生徒のための授業もあります。しかし、学習要綱を決定する人々は、他の国々の人々と同じような考え方を持っています。芸術は学問的な科目ではなく、最終目的・試験に合格し、良い大学で良い成績を修めるための学術的な教育 - を保証することはない楽しい余計な科目という考え方です。もちろん、私たちはこれが真実ではないことを知っています。真に学問がある人は、数学や科学や言語だけでなく、より多くを知り、より多くを理解すべきなのです。教育とは情報を詰めることではなく、物事を理解することであり、広い視野を持ち、創造的であり、違う方法で物事を考えることなのです。情報はインターネットですぐに得られます。本当に理解するには経験し、自分の目や耳を世界に向かって開かなければなりません。

皆さんが学校と一緒に芸術の仕事をしたい場合や、皆さんが生徒にとって何か価値のあるものを提供したい場合、この考え方を乗り越え、先生や主任教諭を説得しなければなりません。

私がアーツ・センターのエデュケーション・オフィサーとして働いていた時、こういった考え方に対処する方策がいくつかありました。どれもすぐに効果が現れたわけでは

ありませんが、時間が経つにつれ、芸術に対して私と同じ考えを持つ多くの先生方を得ることができました。

最初の取り組みの一つは、全ての地元の学校に掲示板を設置したことです。掲示板には劇場の名前が目立つように表示しました。私はこの掲示板を地元の訓練センターでとても安く作りました。劇場の宣伝をするため、各学校で先生に最新のお知らせを掲示し続けるようお願いし、代わりに特定の公演の無料券をあげました。掲示板に提示された物の一つは、私が作っていたニュースレターで、各学期間の劇場の催しが載せられていました。

また、年度当初に、ワインやコーヒー等の飲み物と軽い食事を用意して、地元の先生のために夜の会合を開き、先生方が他の先生に会う機会を作りました。そこで、先生方に新年度のために私が企画した課外授業について説明しました。時には会合の最後に無料公演を見に行くこともありましたが、ほとんどの場合は話が弾み、センター内に残ってしまいました。

そして、私は毎年先生のための芸術活動を実施するようにしました。最も人気があったのは演劇のクラスで、毎週開催されました。しかし、最も重要な事は、生徒が何を必要としているか、また今現在教育界で何が起こっているのかを、私に教えてくれる先生達の委員会があったということです。

これらは、先生方に、芸術、劇場、自分たちの持つ創造的になりうる能力というものに気づかせることになりました。企画は大変上手くいき、多くの資金も必要としませんでした。皆さんはご自身の学校や学校のシステムを良くご存知だと思いますし、芸術が提供できる事を先生達に理解してもらう独自の方策を、考えることができると思います。ここで申し上げたいのは、もし皆さんが学校と一緒に活動したいのであれば、これは極めて重要だということです。周知ですが、もし皆さんが学校で働きたいのであれば、2人の重要な人物と友達にならなければいけません。主任教諭と管理人さんです！

芸術家か教師か？

2つ目の課題は、学校での皆さんの役割は代替教師ではないということを経験することです。学校と何を行うにせよ、皆さんが通常の授業内容を向上させ、豊かにするためにやっていることを分かち合う気持ちでいなければなりません。教師も芸術家も専門家であり、お互い尊重しあうべきです。もし先生たちが、何らかの方法で皆さんが先生の仕事を引き継ぐと考えることがあってはならないのです。

1982年、ガルペンキアン財団が出版した「学校における芸術」という名著のなかで、著者のケネス・ロビンソンは、次のように述べています。

「学校を訪れる芸術家が教師に変貌しない、ということが極めて重要である。企画の成功は、学校が教師と芸術家の違いを認識し、悪用しないことにかかっている。」

学校は日々の勉強からの変化や質の向上を求めています。教師のみならず、生徒や芸術団体が、これが最良の教育活動になるであろうと認識するのは良いことです。教育の援助活

動を行っている芸術団体の第一人者（世界的に有名な交響楽団でもあります。）が、スコットランド室内交響楽団です。この交響楽団の責任者であるロイ・マックエヴァンは、次のように語りました。

「我々は何をするかという問いに対し、私達は教育システムの中のどこで接点を持つかを認識し、私達が出来ない何かを提供しなければならない。教育は、交響楽団に何か特別なもの、何か質を向上させるものを提供することを期待しているのだ。」

学校にはできないけれど、皆さんが提供できるものは、本物の演劇や演技の活気のある生き生きとした世界であり、芝居の成立に関して皆さんが持てる全ての知識です。これこそが、学校にとって、とても特別でユニークな機会なのです。

相手の調子に合わせる

地域で活動する場合、単に皆さんが地域にとって最良であると考えたものを提供するのではなく、むしろ地域が必要としているものや、地域の人々が何を望み、何に興味を持っているのかを見つけ出すことが重要です。皆さんが経験から得た知識の幅を広げてはいけないと言うわけではありません。むしろすべきですが、手始めはゆっくりと進め、質問をし、尊敬の念を示すべきです。人々は、皆さんの文化を注ぎ込む空っぽのカップではありません。彼らには彼らの経験があり、他に与える想像力を持っているのです。

芸術のための芸術？

英国では、いかに人々が芸術や芸術に関わることで発言する力を得るか、自分自身を、自信をもって表現する手段として、ということが注目されています。例えば、地域の活動家たちなどです。芸術は社会を変える道具である、と認識することがとても大切です。皆さんが芸術的な面において実行したいことと、地域が芸術を使って他の目的のためにしたいこととのバランスをいかに取っていくかを決めなければなりません。現実的な問題になるには時間がかかりますが、この点を意識しなくてはなりません。

始 動

皆さんが仕事を始め維持していくためには以下のことが必要です。（英語ではどれも「P」で始まる単語です。）

- 情熱（Passion） - 組織全体が学校や地域の中で働くことは、重要であり価値のあることであるという考えに責任を持ち、過程も結果も質を高くすべく情熱を持つ必要があります。
- 計画（Plan） - 組織全体として、皆さんは教育活動に対するミッション・ステートメントや何を行うのか、誰がするのか、そしてどのような結果を望むのかに関して良く話し合い、討議を重ねる必要があります。そして最も重要なことは書き記すことです。その企画書のコピーは全員に渡し、定期的に再検討をして下さい。また、例え小規模であっても、予算を立て企画書に添付して下さい。

- ・ 人 (Person) - 組織のメンバーの一人が担当者なり、活動を進めることが特に重要です。もしその人物が常勤であれば最良です。しかし、資金上それが困難であることもあるでしょう。英国では、こういった仕事をする人は通常「エデュケーション・オフィサー」と呼ばれています。

彼らの仕事は、

- 学校や地域のグループに連絡を取り、連絡情報のデータベースを作り、維持すること。
- 演出家や他のスタッフと劇場の演目を話し合い、教育活動に活用し、役立たせるにはどの分野が有益であるかを決定すること。
- 劇場へ公演に来る劇団や劇場専属の劇団の演出家か俳優たちと協議するために連絡をとること。

例えば、英国で頻繁に行われているのは、「本から舞台へ (Page to Stage)」イベントです。これは通常生徒のためのもので、芝居の演出家と数名の俳優が関わって芝居とそのテーマについて語り、シーンのいくつかを説明するものです。

- 子供、老人、服役囚、障害のある人々等、様々なグループの人たちを対象とした (劇場のプログラムから) 独立したアート・プロジェクトを企画すること。
- 活動の評価を行い、評価を改善の基盤として使い、継続的に活動を発展させていくこと。
- 教育教材の作成。劇場が示すことに人々が関心を寄せるような紙やデジタルの教材。
- 持続可能で長続きする企画を立てる。青少年のための劇団、地域活動等。
- 教育用の予算を管理すること。
- 時に、エデュケーション・オフィサーは、資金を調達することも期待されることがありますが、私はこれには全く賛成できません。
- エデュケーション・オフィサー自身が芸術家であることもあり、ワークショップを開くこともできます。これは皆さんが教育プログラムに着手する場合、経費を引き下げるだけでなく、地域を知る手助けにもなります。

- ・ 参加への関与 - 例えば、芝居の切符を安く提供することだけでは十分とは言えません。皆さんは、人々に活動に携わることで彼ら自身の持つ創造性を試す機会を提供しなければなりません。

また、プログラムの鍵となる実用的な原則が二つあります。

- ・ 評価 - 皆さんの活動が良いものであったかどうかを、どうやって知りますか？ いかに関心の活動により良くするかを、どうやって知りますか？ 参加者の考えを聞き、優劣の基準を持たなければなりません。そうすれば、皆さんの活動は向上していくでしょう。
- ・ 実験 - 試すことを恐れしないで下さい。創意を働かせ、革新的であって下さい。それが芸術を前進させる方法であり、退屈で平凡なものにすることを避けるのです。

皆さんが行う活動は、自分で決めていただきたいと思います。スコットランドの状況に合っているものが、日本の状況に合う必要はありません。エデュケーション・オフィサーの仕事を説明しましたが、実際行われている活動の一般的な項目を説明したつもりです。

皆さんの活動を制限する2つは、想像力を抑制してしまうこと - 想像力に限界がないのはよくご存知だと思います - であり、利用できる資金の問題です。

クリエイティブ・リンクスというのは、スコットランド芸術評議会が資金を出し、運営している大変特別なプログラムでもあります。スコットランドでは、教育は中央政府の仕事ですが、32自治体が管理を行っています。私も、各自治体と協力して、教育部局内に一つの上级のポストを置きました。行政の内側から芸術に対する認識を高めるために働きかけ、児童青少年のための企画を行うために地域や全国の芸術団体と協働し、芸術教育のために資金を調達し、芸術家らと働くといった様々な活動を行うことを目的としています。

これから見ていただく映像は、スコットランド西部のクリエイティブ・リンクスの担当者が運営するプロジェクト「ARTSNET」の成果です。この公演は参加者全員の成果が投入されています。参加者はダンス、演劇、映画、デザイン、音楽、芸術活動に関わっていて、年に一度、彼らが成し得たことを披露するために公演が行われています。画面の中で話しているのが、指導にあたっているプロと生徒の何人かです。

ご清聴ありがとうございました。

日時 2003年11月16日
於 国立オリンピック記念青少年総合センター
(翻訳/山田公子)

「クリエイティブ・リンクス」報告書

- 2004年1月発行予定 -

- ・ シンポジウム基調報告 (日本語版・英語版)
- ・ パネルディスカッション
- ・ エデュケーション・オフィサーのためのワークショップ
- ・ 参考資料
英国に見るエデュケーション&コミュニティ・プログラム 他

頒布予定価格 700円 (含送料)
尚、HPからダウンロード可能 (無料)

情報・経験・研究成果を分かち合えるということ

2003年、イングランドは芸術教育復興のムードに躍っているかに見える。というのは、ドラマ教育を発展させる（あるいは揺さぶる）政府関連の報告書が続々と発行・出版されているからだ。前号でも紹介したように、教育技術省が中学校前半期（KS3）対象のドラマ教育の国家戦略として「ドラマ・オブジェクティブ・バンク」を発表、また、政府の資格カリキュラム委員会（QCA）が同じKS3のドラマと読み書き能力のための素材としてガイドブック「ギビング・ア・ヴォイス」を発行。さらに、学校教育と地方自治体教育部局を掌握・視察を行う「教育水準庁（Ofsted）」は、中学校（KS3ならびに4）と義務教育以後のドラマ&シアター・スタディについて、それぞれの評価指針、「都市部の学校を改善する芸術の役割」、「小中学校におけるクリエイティビティ推進教育」などの報告書が続々と発行している。そして、芸術・文化政策の側からも、イングランド芸術評議会が、1992年以来、11年ぶりに「ドラマ・イン・スクール - 第2版」報告書を発行した。

これだけ政府関係団体からの報告書が一気に発行されていることには、学校教育における芸術教育の重要性を政府が強く認識し、本気で遂行しようとする意思を感じるとともに、いまだ芸術教育に価値を見出さない人々の存在が少なくないことも推測されてくる。とりわけ、教育水準庁の報告書は、芸術教育が疑われがちな「教育的成果」と、曖昧になりがちな「評価」に視点がおかれているだけに、学力重視派の反発をいかに論破するかに努める専門家の真摯な思いが伝わってくる。芸術評議会の「ドラマ・イン・スクール」も、第1版に見られた芸術評議会による劇場・劇団の宣伝臭さが抜けて（かなぐり捨てて）、教師よりになり、概念的ではあるものの狙いがかなりクリアになった。

英国を代表する教育研究機関「教育研究国家財団（NFER）」が、6月に発表した芸術のための場を保持する？ - イングランドの小学校における芸術についての調査」報告書が、かつて深刻な状態にあった芸術教育が、校長や教師たちの熱意によって改善されつつあることを示している。しかし、日本以上に校長の裁量が強いだけに（ナショナル・カリキュラムはあるが、開講科目・教師の雇用は、すべて校長の裁量）、調査に答えなかった学校ではどうなのか、あるいは現場の教師たちはどう感じているのだろう、などと思い巡らしてしまう（スコットランドのある公立中学校での学校公演を視察した際、公演の真っ最中に「試験の前なのに」とばかりに怒鳴り込んできた年配の教師の姿を目の当たりにした。「やっぱり、ここでも」なのである）。

それにつけても、ドラマや芸術といった人の解釈によって異なる価値としての教育を、感情論ではなく、また手前味噌ではなく批判的に、さらにできる限り客観的に議論し、評価し、立証しようとしていくという事実、そしてそれらが「公的」な報告書という形で、続々と世に送り出される環境には少なからず羨ましさを感じてしまう。しかも、その多くが、関係者・団体だけに配布される形ではなく、求めるものが誰でも入手できる有償の印刷物として出版・発行、あるいは、ダウンロード可能な形として無償で提供されているのである。

日本にも、多くの同様の報告書があるのだろう。少なからずは、政府や自治体からの委託や、助成によるものである。しかし、そのほとんどは、現場に働く者はおろか、研究者の目にすら触れることはない。情報が公開されない、あるいは、公開されていることすら知らされない。一方、大学などの研究者は情報を貪欲に求めるものの、自らは発信しようとしにくいことが多い（提供しても、返してくれることはまずないのよね...）。だから、それをたたき台に議論を深めることもできない。このような情報や研究成果が分かち合えないことから、どれだけの無駄を私たちは払っているのだろう？ 目に触れることのない無数の報告書は、何のために、誰のために存在するのか？ パブリックに公開されることに何らかの問題があるのだろうか？

イングランドの無数の報告書・研究も、その多くは一時的なものに過ぎず、時間の経過のなかで、忘れ去られ消えてしまう。それでも、尚、時代を超えて継承されるものもあり、それが蓄積となっていく。さらに、そこにもう一つ見えてくるのは、縦割り行政や縄張りを越えた「協働」と、重層的な「フォーメーション・プレイ」である。これは紳士の国のスポーツマン・シップやフェア・プレイ精神の産物とも重なってみえる。日本で、それなりの努力はありながら変革への意思が感じられないのは、これが見えない、感じられないからなのではないか - むしろ、足を引っ張り合っていたりする光景がある。かつて、ある英国のポリシー・メーカーから、「日本は和の国、チームワークの国と聞いていたが、なぜ一つ目的のために関係団体がばらばらに仕事を進めるのか」と訊ねられた。「パートナーシップ」や「協働」の冠のもとにあっても、縄張り争いや競争、あるいは、携わるものの奇妙な差別意識が頭をもたげてしまう。そのために情報も報告書も、ほんとうの意味でパブリックに公開されないのかもしれない。そこに著作権意識の希薄さも関係してくるのだろう。まず変革が必要なのは、このあたりからなのか。（中山夏織）

ここで紹介した各種報告書などの入手方法・価格等についてはお訊ね下さい。

続ドラマ教育体験記 その1

寺本 佳世 俳優・劇団青年劇場

8月16日、1年間にわたるドラマ教育研修(文化庁在外研修員)期間を終え、イギリスから帰国しました。前回、この機関紙に書かせていただいたときは、正直に言って「私の人生で一番辛い」と言っても過言ではなかったときなので、抽象的で、かつ感傷的な文章になってしまい、読んでくださった方には良く解らなかったろうと反省しております。今回は、その反省を含め、私が解らないながらも見てきたこと、知ってしまったこと、感じた事をお伝えしたいと思います。また、読者の方々の中には、ケン(ケネス・テラー先生、ミドルセックス大学PGCEドラマ教育主任講師)のワークショップを受講された方や、ドラマ教育に興味を持たれている方が多くいらっしゃるの、私の体験も意味があると感じています。と、大仰なことを書いても、解らなかったことは解らなかったの、今回は、「聞くとはと見るとは大違い」だったことを中心にご報告したいと思います。

昨年、イギリスでは多発する青少年への犯罪の防止策から、学校に入るには「犯罪歴のない証明書」を必要(その学校の教師でさえも)とされてしまい、私は10月の初めに現地で指紋を取りに警察に行き(これも得がたい経験)、日本大使館を通じて、警察庁、外務省に申請しましたが、2度却下されました。多くの方のお力添えをいただいて、3月の初めに、ようやくその証明書を入手した後、授業を見せていただける学校が増え、プライマリー・スクール(小学校:5歳から11歳)2校と、スコットランドでTAGシアター・カンパニーによる公演にちなんだ授業と、学校内での公演を見せていただいたセカンダリー・スクール(11歳から18歳)を入れると、合計17校の学校にお伺いしました。

証明書がなくても11月から受け入れてくれたのが、私の下宿に一番近くにあるキングスバリー・ハイスクールです。10年前のケンの教え子エマがドラマ主任、そして、3年前の学生だったカトリーヌ、そして、実習生としてクラスメイトが、一学期(9~12月)と、それ以後の6月までの二学期分に、それぞれ1人が週3~4日間授業を担当していました。ここに通う生徒は、ほとんどが有色人種で、エマの話によると、学力にとっても差があるそうです。クラスもY7から成績順に分かれていて、初めはなんて残酷なのだろうと思いました。ある方から、この国はたくさん移民を受け入れています、ネイティブなイギリス人でさえ、学力より家柄がその人の将来に影響すると教えてもらい、11歳から区別されながら育つことは、ある意味、必要なことなのかなとも思うようになりました。

この学校の特徴として、ドラマ・スキルをまるで単語や方程式を覚えるように、習っていく項目が学年ごとに一覧表になっていて、毎回の授業の終わりに、「今日は技術の『紹介があった』『発展させた』『理解して使い方がわかった』」というように、三段階をチェックしていくことでした。つまり、観客に見せるということ、ボディ・ランゲージ、表情などで表現する方法を、整理反芻・確認(thought tracking)す

ることで、テキストの背景や意味を学んでいるのです。考えてみれば、私自身は誰からもこのような事を教えてもらった事はありませんし、私が日本で子供たちを指導する際も、このように細かく教えず、ただ、「演じてみなさい。」と言ってきました。改めてずいぶん乱暴な教え方をしていたものだと思います。どの学校においても、ドラマ・スキルを教えるのですが、このような形を取っているのはここだけでした。

また、初めてカトリーヌの授業を見せてもらったときに、ちょっとおしゃべりをしていた生徒1人を、突然に大きな声で「今すぐ教室から出て行きなさい!」と怒り出したことがあります。私は「何もその子だけをそんなにしからなくても」と、その場に居たたまれなくて下を向いてしまいました。ところが、次の瞬間、カトリーヌの、その子を賞賛する声と拍手がして、何が起こったのかと顔をあげると、怒られた子は嬉しそうに自分の席に帰ってきました。彼女は「私は今、何をした?」と生徒たちに聞きます。生徒は「大きな声を出した」「声が変わった」「顔の表情が怖くなった」などと言い、はっきりと話すこと、声のトーン、表情というものを教え、さらに急に違う性格の人になることで、ティーチャー・イン・ロール(以下TIR)と、キャラクター化(役を演じること)を実感として伝えたのです。さらに、怒られた子が言い訳しふてくされながら廊下に出て行ったことを「すばらしいインプロ(即興)だった!」と、褒めてしまいます。一挙両得というか、一石二鳥というか、二度とは使えない手ですが、そのクラスの悪ガキ君も、これでドラマが好きになって、先生の言うことを聞くようになってしまいます。ちなみに、彼女は異例の早さで、この秋から違う学校のドラマ主任の地位を得ました。

ホロコーストをテーマにした授業で、エマは、TIRを活用して突然ナチス兵になり、ユダヤ人である生徒たちをホロコーストへ護送していくシーンを演じました。ホロコーストはY9の歴史の授業の課題ですが、「Y8のドラマの授業でやっておくと、理解しやすいから」とエマは説明してくれました。そして、「この授業はケンが教えてくれた中で一番好き」とも。私たちの学年はこの授業は習っていませんでしたが、後で、ケンにこの話をすると、「エマはユダヤ人だからじゃないかな」と言われました。私にとってこのことは驚きでした。なぜなら、大学の私たちの授業でケンが、TIRで、急に将校になり、私たち兵士に命令したことがありました。皆は楽しそうにケンに敬礼をします。でも私は、大学が始まったばかりだったこともありますが、どうしても兵士の真似を楽しむことはできませんでした。そのときは、戦争に勝った国と、負けた国の国民性の違いかと思いましたが、ユダヤ人のエマがナチスを演じたことの意味を思うとき、俳優ならその役はやりたくないと思えるが、演じる目的の違うドラマ教師は生徒にとって有効なことであれば、どんなことでも演ってみせる「大きさ」のようなものを感じ、私の甘さを感じ知りました。

週一度通ったキングスバリー・ハイスクールのみならず、他校でも、このようなエピソードは多々ありました。そのなかで、もう一校、どうしても報告しなければならない経験があります。その学校Wは、50母国語を超える、移民の子供たちが通う学校です。そこに、補助教員の経験をもつ、私の目から見ても教師としての資質を持つクラスメイトSが、わざわざ希望してその学校に実習に行っていました。はじめて訪問したとき、高校にあたるシックスフォームの生徒たちが

下級生の前でチェーホフの「熊」を演じている途中でした。コミカルながら熱いラブシーンと、演じることの楽しさを体いっぱい表している姿に感動しました。その後、SのY7のフォーラム・シアターのインプロを中心にした授業を見て、多動症の子もいて大変な中にも、楽しく授業を進めているのを「さすがだなあ」と感じました。Sも「このクラスが私の一番のお気に入りなの」と話していたのです。

その続きが見たくなって、私は翌週もまたその学校へ行きました。1時間目はY9で、アンネ・フランクがテーマです。Sは、ユダヤ人がマークをつけられたことの意味を体験させたくて、生徒の鼻に口紅で印をつけようとしていました。ところが、その子が拒否。Sは違う子にまた印をつけようとして、また拒否され、それでもあきらめずに続けてほとんどの子に印をつけました。ところが、この日は授業に遅れてくる子が多く、また、来年度ドラマの授業を選択する子が3人しかいないクラスだったこともあり、生徒にやる気はなく、眼の色が違いました。Sの指示にも、たまたした動きを示すのみで、授業が成立しませんでした。

2時間目はY8。テーマはサイレント・シアターで、どうやら前回の授業でサイレント映画を見ていたようで、そのシーンをグループに分かれてインプロするものでした。この日は寒くコートを着たままでいる子が多くいて、Sはコートを脱ぐように指導しました。私はこんなに寒いのかから着ていても良いと言えば良いのと思っていたのですが、Sは譲りません。また、グループ分けが気に入らないと文句をいって何もしなかったり、ペアでの作業では相手が気に入らないと泣き出す子もいました。

そして、彼女のお気に入りのY7のクラスでも問題がありました。英語もほとんど話せないフセイン君というイラクから転校生がいて、早くもイジメラレコになっていました。多動症の子は言うことは聞かないし、ペア作業に文句を言う子はいるし、一度に5つぐらいの事件が起こってしまったのです。その後、Sは「昨日眠れなかったから、私の授業の運び方がいけなかったの、ごめんね、カヨ」と言ってくれました。(クラスメイトは皆、授業がうまく行かないと「自分がいけなかった」と、言います。)

なんと言う一日だったのでしょうか。私はそれこそSのために、ただ祈って見ている事しかできませんでした。そして私の持った感想は、「この学校の生徒は、日本の一部の、そして多くの子供たちと似ている」というものでした。申し訳ないことですが、私はずっと「うまくいかない授業」を待ち望んでいたのです。そうなのです。それまで見ていた授業風景は、日本ではありえない「見事な光景」ばかりだったからです。

しかし、さすがにこの日の3連続「授業崩壊」は、とても辛いものでした。その夜、私はケンに意見を聞きたいとEメールを出しました。さっそく返事を下さり、私は友人に初めて通訳をお願いし、次の日ケンに会いに行きました。

私は個々に起こったことを報告し、自分の考えを伝えましたが、「もし、Sの立場だったら」への私の答えは「ノー・アイデア」でしたが、ケンが教えてくれた大要は、以下のようなものでした。

「あの学校の生徒の多くは、難民や戦争を経験している。もうすでにアンネのような体験をしている子達に、もう一度同じ体験(マークをつける)をさせる必要はなかった。ドラマはまず『面白い(興味を引くという意味も含む)』と、子供たちに思わせることが先決。ドラマの授業をするとき(プランを立てるとき)には、十分にその生徒たちの背景や環境を知ることが大切である。」「どの国に行っても、どんな学校でも、残念ながら皆からノケモノにされる子がいる。その子とペアを組むのを皆が嫌うのであれば、教師がその子とペアになることによって、その子のステイタスをあげてあげることができるはずだ。」

また、寒いのにコートを脱がせる事について、「ケンならどうするの?」と質問すると、「脱ぐように指導するよ。なぜならそれが、ドラマの授業の『衣装』だからだ。」という答えがかえってきました。

そして、「その学校の子達は日本の生徒に似ていた」という私の感想を伝えると、「どうして、もっとも恵まれた国の一つである日本の子と、その子達が似ているのだろう」と、ケンは不思議がっていました。

(次号へ続く)

ロシアで学ぶ俳優教育のスタンダード！

日露演劇会議が、国立サンクトペテルブルク演劇大学で、日本人を対象とした3週間の演技のグループ・レッスンを主催。テキストを使つての演技、発声、舞台動作を中心としたオリジナル・プログラムで、他に観劇・見学などのプログラムも同時に実施。

日程 2004年3月6日 - 28日(成田発着)
場所 ロシア国立サンクトペテルブルク演劇大学
費用 39万5千円
(旅費・宿泊費・授業料・観劇料・通訳料・保険料込)
応募資格 プロおよび演劇学校在籍者
応募締切 2004年1月9日
ツアー責任者 菊池准・西村陽一

お問合せ・申し込み 日露演劇会議事務局(村井健)
電話・FAX 045-941-0283
E-mail Kenmurai@pj8.so-net.ne.jp

あわせて、サンクトペテルブルクのエカテリーナ宮殿、エルミタージュ、ロシア文学博物館、血の教会...モスクワのクレムリン、スタニスラフスキーの家、チェーホフ記念館、モスクワ芸術座のバックステージツアー...。盛りだくさんの観光と、観劇を組み合わせた、ロシア・ツアーも実施。演劇大国ロシアを知る絶好の機会です。(添乗員付き)

開催期日 2004年3月20日 - 28日
費用 29万5千円

「アートサポートふくおか」刊行物

音楽・演劇・美術など様々な芸術文化を身近なところで楽しむことができる環境づくりをめざす非営利組織アートサポートふくおかでは、事業記録を刊行物として発行しています。

- 「芸術家と学校・地域のお見合いセミナーの記録」
- 子どもと芸術のしあわせな出会いをめざして -
(A4判・20頁)(500円・税込み)
- アートサポートふくおかレクチャーシリーズNo.1
「文化ホールにおける職員の役割」(帝塚山大学法政策学部教授 中川幾郎氏)
(A5判・24頁)(500円・税込み)
- 「体験セミナー：演劇と教育のしあわせな関係を探ろう - 英国の手法に学ぶ - の記録」(シアター・ワークショップ・エディンバラ芸術監督ロバート・レー)
(A4判・20頁)(500円・税込み)

お問い合わせ・お申し込み
アートサポートふくおか

電話 090-7462-1657(古賀)
FAX 092-591-6517
Mail office@as-fuk.com

明治大学リバティアカデミー

文化政策セミナー

- 芸術と社会の関係を支えるもの -

芸術家の創造を支援し、芸術活動の振興を図ることが文化政策のかつての主流でしたが、今日ではそれが大きく変化。教育や雇用、都市計画といった様々な要素とともに、役割を広げる一方で、根幹にある芸術家の創造を困難なものにしています。文化政策の理想像を追い求めるとともに、その足元を考えていきます。

講師 中山夏織(アーツコンサルタント)

日時 2004年1月24日(土)
12:50~17:50(3講座分)

会場 明治大学リバティアカデミー
参加費 6000円(+入会金3000円)

お問い合わせ・お申し込み
明治大学リバティアカデミー

電話 03-3296-4423
FAX 03-3296-4542
Mail academy@mics.meiji.ac.jp
URL http://academy.meiji.jp

編集後記

2003年も残るところわずかとなりました。この1年、世界で、日本で、そして狭く芸術という場で起きた変化に思い巡らす季節となりました。実際のところ、あまりに大きな事件や変化がありすぎて、受けとめるだけでもかなりの精神力が必要になってしまいます。2004年が穏やかでしあわせな、維持できる発展の年となることを強く望んでいます。そのために芸術として何ができるのか、ということをつねに考えていきたいと思います。ドラマ教育や、文化政策、情報の共有ということに加えて、2004年は「劇場という場」についても重点的に考えていきたいと計画しています。とりわけ、経済の低迷の中で閉鎖が進み、民営化も模索されるようになっていく今日、「劇場の再生」という視点から探求できないだろうか…。難しい課題ですが、少しずつでも挑んでいければと思います。(中山夏織)

特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク

国際化時代の多様な文化という視点に立ち、舞台芸術関連の様々な職業のためのセミナーやワークショップをはじめ、調査研究、情報サービス、コンサルティングなど、舞台芸術にかかるインフラストラクチャー確立をめざすヒューマン・ネットワークです。国際的な視野から、舞台芸術と社会(とりわけ、教育、福祉、コミュニティ)との関係性の強化、舞台芸術関連職業のトレーニングの理念構築とその具現化、文化政策・アートマネジメントにかかる情報の共有化、そしてメインストリームシアターとコミュニティシアターの相互リンケージを目的としています。2000年12月6日、東京都によりNPO法人として認証され、12月11日、正式に設立されました。

Theatre & Policy <シアター&ポリシー>

シアタープランニングネットワークの基幹事業として、2000年6月から定期発行(隔月刊・年6回)されています。定期購読をご希望の方は、シアタープランニングネットワークの準会員としてご参加下さい。年会費3千円(送料込み)を下記までご送金ください。送金の際には、住所、氏名、電話番号を忘れずにご記載下さいようお願い申し上げます。

郵便振替口座 00190-0-191663 加入者名 シアタープランニングネットワーク

Theatre & Policy

2003年12月20日発行(通巻第22号)

編集人 中山 夏織

発行 シアタープランニングネットワーク

Copyright 2003 by Theatre Planning Network

禁無断転載

特定非営利活動法人

シアタープランニングネットワーク

〒182-0003

東京都調布市若葉町1-33-43-202

電話&ファックス 03-5384-871

e-mail tpn1@msb.biglobe.ne.jp

http://www5a.biglobe.ne.jp/~tpn